回顧式家族調査からみる家族形成期の意識の変化
― 結婚・離婚・再婚・子の出生 ―

○保田時男（関西大学）

1. 目的

本報告では、回顧式家族調査によって収集したパネルデータを用いて、家族形成期のイベント（結婚・離婚・再婚・子の出生）にともなう人々の意識を記述する。「未婚者と既婚者の幸福感を比較しても、結婚によって幸福感が上がるかどうかを確かめることはできない」このような記述は、横断データの欠点とパネル調査の必要性を説明する例としてよく用いられる。しかしながら、実際にはパネル調査で結婚にともなう幸福感等の意識の変化を分析した研究は、思いのほか少ない。そのような分析が可能なデータをパネル調査で十分に集めることは、意外と困難だからである。結婚の有無や時期には個人差があるうえ、途中で調査から脱落する割合が無視できないほど大きいからである。子どもの出生、離婚、再婚等にともなう変化をパネル調査で追うことは、より困難である。より発生年齢の幅が大きいことに加えて、調査から脱落する可能性がさらに高まると予想されるからである。このような理由から、家族形成期のイベントに伴う意識の変化は意外と計量的な記述が十分にされていない。

2. 回顧調査データの活用

以上のような問題意識から、本報告では回顧調査データを用いて一般的に家族形成期の人々が重要なイベント（結婚・離婚・再婚・子の出生）によってどのような意識の変化を起こしているのか、基本的な記述を行いたい。パネル調査ではなく、過去の出来事を思い出してもらう回顧調査を用いることで、脱落のない十分なサイズのサンプルで、長期間の変化を偏りなく記述できると考えている。分析に用いるのは、2022 年 2～3 月に実施した「家族に関する振り返り調査」である。2021 年末時点で 35～49 歳の男女 7620 人を全国から層化二段無作為抽出し、郵送調査によって 3327 票という比較的大きなサンプルサイズを得た（有効回収率 43.7%）。

この調査では図 1 のような年表形式の回答欄を用いて、15 歳時から現在までの変化を回答してもらう調査項目を多用している（調査票全体は http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~tyasuda/files/survey/retro2022_questionnaire.pdf で公開）。このうち、幸福感、経済的ゆとり、余暇活動の充実、性役割分業意識、夫婦関係の満足度、子育ての経済的負担感、子育ての身体・心理的負担感、子育ての喜び、といった意識項目にとくに注目し、家族形成期のイベント（結婚・離婚・再婚・子の出生）による変化のパターンを記述する。例えば、結婚前後の幸福感の変化は図 2 のように記述できる。当日は他の調査結果と共に、この世代の人々にとって婚姻や子育てが持つ意味について考察する。

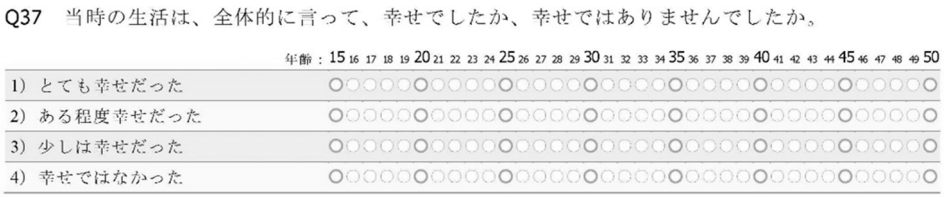
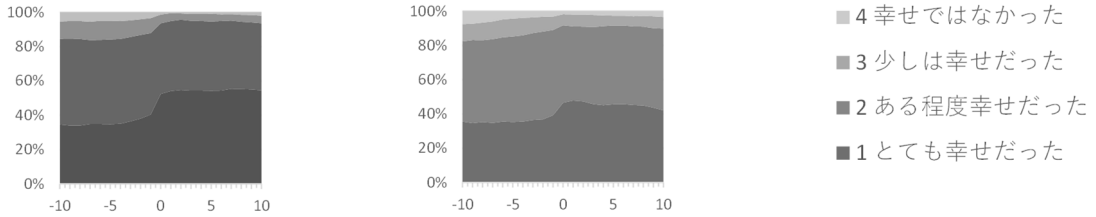


図 1　回顧式家族調査における年表形式の質問項目



a）男性　　b）女性

図 2　結婚前後の幸福感の変化（男女別）［横軸：結婚年数］

キーワード：回顧調査、パネルデータ、家族形成期